

ブックレビュー



『抵抗の新聞人 桐生悠々』

井出孫六 著

岩波書店 刊 (TEL03-5210-4000)

定価1,232円 (本体1,120円+税)

直木賞作家の故・井出孫六が「反骨のジャーナリスト」桐生悠々(1873～1941)の生涯を描いた評伝である。1980年に岩波新書として刊行されたが、2021年に岩波現代文庫に収録された。その際、解説を気鋭のジャーナリスト青木理が務めている。

井出と青木は世代が離れた長野県出身だ。桐生は石川県で旧加賀藩士族の三男に生まれた。四高から東京帝大法科に進んだ桐生は紆余曲折を経て「新聞人」になり、1910年に『信濃毎日』の主筆に着任している。三者の交点は時代を超えた長野県にあった。

井出は記す。「悠々のこれまでの無駄足のすべてが、じつは信毎主筆たるための、それにターゲットをおいた修練であったとさえ思われてくるような紙上の活躍ぶりだ」と。青木は文庫本の解説に認める。「悠々は決して破天荒に抵抗するだけの新

聞人ではなく、むしろ新聞の原理原則に(中略)極めて忠実な、非常にオーソドックスな正道を行く新聞人、メディア人であったことに気づかされる」と。

「メディアとジャーナリズム」のあり方が問われている今だからこそ新装の登場だ。「戦後民主主義」が形骸化し、国家・国権主義的な潮位が高まる現代にあって、「言わねばならないこと」に燃えるような半生を捧げた桐生から私たちは何を学ぶべきか。言論人に限らず、現代を生きるすべての人びとが問われている。

「戦争の世紀」に「孤軍奮闘の大悪戦」を続けた桐生に、血を吐くような諫言がある。「だから、言ったのではないか、疾(と)くに軍部の盲動を諷めなければ、その害の及ぶところ実に測り知るべからざるものがある」と。かくてこの国は桐生の没後4年にして、あの壊滅的な敗戦に追い込まれていく。そんな愚かな時代を二度と繰り返してはならない。

さんかいのげん
(山海野 玄)